

幼児の人物画の縦断調査

末 次 絵 里 子*

Longitudinal Surveys of Drawing a Man for the Young Children

Eriko SUETSUGU

Key words : 人物画 drawing a man, 身体像 body image, 幼児 young children, 発達 development

I 問題と目的

人物画は「セルフイメージ」が描き出されやすいため、時代と共に変化する生活環境・文化の影響を受ける子どもの心と身体の今、つまり現実の姿を視覚的に表すと言える。それ故、アセスメントとしての人物画活用は、周囲の大人に子どもへのかかわり方や子どもの生活スタイルの在り方・質の是非を示唆するものとして有効である。

心理アセスメントの一環として人物画を用いる場合、知的発達の評価としての利用と、パーソナリティ投影法としての利用が一般的である。グッドイナフ人物画知能検査 (Goodenough Draw a Man Test; 以下, DAM) は、日本においては小林によって1977年に標準化され、臨床の現場で主に動作性の知的発達評価の方法として活用されてきた。子どものアセスメントにおいては、パーソナリティを見ていく上でもまずは発達の状態像をとらえておくことが必要であることから、DAMによって精神年齢 (MA)、そして知能指数 (IQ) を算出することには意義がある。

DAMを用いた研究としては、近年では次のようなものがある。例えば、加藤・山田 (2010) は、3歳9カ月～6歳8カ月までの166名を被験者として日本版ミラー幼児発達スクリーニング検査とDAMを実施した結果を報告している¹⁾。DAMの発達指数は生活年齢で5歳8カ月までは年齢相応の100を超える値を示しているが、5歳9カ月～6歳2カ月 (32名) では96.9、6歳3カ月～6歳8カ月では94.5と低下しており、さらにいずれの年齢段階においても女兒が高い得点を得ているとしている。DAMは男子像を評価対象にしているが、加藤・山田 (2010) の研究における評価では、女兒については女子像を対象としての採点がなされている。その理由として、母子家庭などの家族関係の複雑化などを背景に、性別に関係な

く採点をしている先行研究や、定型発達児を対象とした研究で男女ともに同性画を好んで描く傾向のあることが報告されていることを挙げている。

また、郷間 (英)・木下・川越・中市・木村・郷間 (安) (2010) は、3歳～6歳の544名の幼児を対象にDAMを実施し、そのうち広汎性発達障害や知的障害と診断された子ども17名ではDAM-IQは平均70.1となり、診断名のない子どものDAM-IQの平均98.3と比較して低値であった²⁾。さらに、診断名はないが、「気になる子ども」63名のDAM-IQは平均92.2の値であったが、描出された人物像はアンバランスの印象を受ける例が多く、発達障害の子どもと同様の特徴をもっているといえるが、より詳細な検討が必要であるとしている。また、男女差 (女兒優位) の存在と5歳・6歳児におけるDAM-IQの低下を指摘している。さらに、川越・郷間 (英)・牛山・池田・郷間 (安) (2011) は、保育園の年長クラスの5歳4カ月～6歳4カ月の幼児 (男児: 48名, 女児: 53名) を対象としてDAMを実施した³⁾。全体のIQは91.3であった。この結果は小林 (1977) のデータ⁴⁾と比較してほぼ6カ月の遅れのあることを示している。そして、女兒の結果はIQが95.4、男児の結果はIQが86.9と、女兒が男児に比べて有意に高得点を得ていることが示されている。

マリアヌヌ・フロスティグ (Frostig, M. 小林訳, 2007) は、身体像は、身体についてのすべての感じの総体、「感じられるままの身体」であると述べている⁵⁾。続けて、「微細な脳損傷のある子どもたちは、描画の中でしばしば身体像の倒錯を示す。すなわち、決まって異常に大きな頭部やそのほかのおかしな描き方をする。」と、運動障害が存在しない微細な脳損傷の子ども的人物描画に見られる歪んだ身体像に言及している。つまり、人物画は、子どもの内面をも含めた自己そのものの身体像を映し出す一つの手段となると考えられる。

* 広島文化学園短期大学保育学科

郷間・大谷・大久保(2008)は、健常児の描画が、軽度の発達障害児と同様の特徴を持つ子どもが増えてきた可能性に言及し⁶⁾、川越・郷間(英)・牛山・池田・郷間(安)(2011)は、最近の子どもの人物の描画特徴の一つとして「頭が大きい」と指摘している³⁾。筆者が携わっている発達相談の臨床場面においても、アンバランスな身体像が描かれた人物画を目にすることが多くなった。今給黎ら(2006)が、「健常児の描画の発達順序や特徴を知っておくことは、今後、障害児の描画を検討するにあたり非常に重要であり、健常例と障害例と比較検討することによって、障害児特有の描画の傾向を探る手がかりになる⁷⁾と述べているように、アセスメントとして人物画を活用する上では、刻々と変化する時代に応じた子どもの描出の傾向を把握しておくことが重要である。そこで、郷間、大谷、大久保(2008)や川越ら(2011)の指摘からさらに相当年数が経過している現在、子どもたちの心や身体はどのような状況に置かれているのか、そして子どもたち自身、自己の身体イメージをどのように形成しているのか、詳しく吟味する必要がある。

人物画に表れる身体像のアンバランスさをより客観的に把握して吟味していくためには、描かれる部位と、その部位の持つ意味に着目して指標を作成して整理することが必要であると考えられる。三浦・渡辺(加)・渡辺(タ)・大山(2005)は、幼児期女児のボディイメージ発達を、全体的評価と内容分析によって解析した⁸⁾。そこで、筆者は、三浦・渡辺(加)・渡辺(タ)・大山(2005)が、「人物の何を描いたか」に着目して作成した「頭部・顔面各部位に関する項目」、「躯幹に関する項目」、「上肢に関する項目」、「下肢に関する項目」、「装飾に関する項目」に分類して作成した指標を参考として、新たな指標の作成を試みた。津守(1987)は、子どもの初期の描画には、人間が中心を持った渦巻の統合体、内と外の統合体として表現されるとする⁸⁾。渦巻の中に目と口と鼻があるから、子どもは人の顔を描いたのだ、とは決めつけられない、顔のように見える渦巻は、むしろ人間の全体であるという。人間は回転する空間としてとらえられており、目や口はその中に最も親しみやすいものとして浮かび上がってくるものであると説明する。すなわち目や口や鼻は、人間のイメージの中心であり、ある人を象徴する内側の部位であると考えられる。また、加藤・山田(2010)は年長児であっても鼻を描かない事例が目立ち、これをテレビや漫画などの影響ではないかと指摘している¹⁾。そこで、人間の内側であり、イメージの中心であり、生きる上で重要な部位である「目」「口」「鼻」「耳」は、これらが意識されて描出される時期や推移を見て、加藤・山田(2010)の指摘¹⁾についても検討するため指標に入れた。津守(1987)はさらに、手や足は初期には渦巻に統合されて描かれていたものがやがて外に向かって描かれるようになるという考え方により、外界と人間

を関係づけるはたらきをすると説明する⁹⁾。そして、帽子などの装飾品は外界に属するもののシンボルとする。鬼丸(1981)も、子どもが描出する丸から出る線を、目には見えないが心を感じとられた、放射というはたらきを図示したもので、作用という非視覚的現象を視覚化したものであるとする¹⁰⁾。そして、腕や脚が方向線としてではなく、手をつかめる実体として、塊量として感ずる感覚の方が強いとこれらが円形となって体部に附着すると述べている。そこで筆者は「手が棒」「足が棒」「手も足も棒」「手も足も肉付き」「手も足も無し」「手か足に指」の指標によって、外界との関係や、外界とのかわりに向けられたエネルギーに注目したいと考えた。「毛髪」「服」「頭に装飾」「服に装飾」の指標は、描画は触知と運動とを主とした直接の身体感覚の表れであるとする鬼丸(1981)の説明¹⁰⁾を基に、触知と運動による身体感覚から得られるものではなく、津守(1987)が述べる⁹⁾外界に属するシンボルに類するものとして取りあげた。つまり、「人間の内側に属するもの」、「外界と人間を関係づけるはたらきをするもの」、「外界に属するもの」に分類し、指標を作成した。三浦・渡辺(加)・渡辺(タ)・大山(2005)は、「描画を全体として眺め、描画から得られる印象を重視し、検査者が直観的に被験者の描画の意味を把握すること」を全体的評価と位置付けている⁸⁾。

本研究においては、次に示す、既述した指標を用いて整理・分析することを軸とする1.と、小林、伊藤によって改訂されたDAM新版(2017)¹¹⁾で本研究の縦断データを分析することを軸とする2.を明らかにすることを目的として、幼児の人物画の調査・分析をし、描画事例の変化を追った。

1. 幼児の人物画に表れる特徴とその推移を明らかにする

郷間(英)・木下・川越・中市・木村・郷間(安)(2010)²⁾や川越・郷間(英)・牛山・池田・郷間(安)(2011)³⁾はアンバランスの身体像の特徴をあげているが、6年経過した時点で収集した2歳児群、年少児群、年中児群、年長児群という4群を対象に調査した本研究のデータからも同様な結果が見いだされるか明らかにする。また、2歳児群、年少児群、年中児群、年長児群という4群を対象に、第1期、第2期、第3期と縦断的に調査することにより、人物画特徴の推移に着目し、幼児期の各発達時期に表れやすい人物画の特徴とその変容を明らかにする。人物画の変容の実際を、事例を通して追うことで各時期による特徴を確認していく。

まず同じ幼児群を3期に渡り調査することにより、単にある部分の描出がまだ出現していないのか、或いは一旦出現したものが描かれなくなったのか、という点と、幼児期という短いスパンで、描出の中により誇張されていきやすい部分と、逆にあまり意識されにくくなる部分

はどこなのか、という点に着目したい。また、同じ保育環境にある4つの年齢群を調査することにより、人物画の変容の特徴に及ぼす保育環境の影響をできるだけ少なくし、年齢の上昇による変容の部分を見出しやすくしたいと考えた。合わせて、一部、異なる群で年齢時期がほぼ重なる調査が可能となるため、人物画特徴に、異なる幼児群でも同年齢時期には同様の結果が見られるかどうかということにも着目したい。これらの点を明らかにすることにより、幼児期に必要な子どもの体験や、より細かいスパンでの生活スタイルの見直しへの妥当な示唆が得られるのではないかと考える。

2. DAM-IQの推移と性差を明らかにする

小林、伊藤によって改訂されたDAM新版(2017)¹¹⁾で本研究の縦断データを分析して、DAM-MA、DAM-IQを算出し、年齢変化を明らかにし、加藤・山田(2010)¹⁾、郷間(英)・木下・川越・中市・木村・郷間(安)(2010)²⁾、川越・郷間(英)・牛山・池田・郷間(安)(2011)³⁾らの先行研究で指摘されている、IQの全体的な遅れ、女兒が男児よりも高得点であるとの性差の指摘についても検討する。

II 方 法

対象児

A県B市のC公立保育園園児、第1期115名、第2期123名、第3期86名を対象とした。第1期、第2期(第1期から6カ月後)、第3期(第2期から8カ月後)の各年齢群別、性別による対象人数と、生活年齢の範囲を表1に示す。

表1 対象児の内訳：第1期、第2期、第3期の各年齢群別、性別による対象人数と、生活年齢の範囲

群	第1期		第2期		第3期	
	n	生活年齢(CA)	n	生活年齢(CA)	n	生活年齢(CA)
第1期で2歳児	全体	18 2 : 4 ~ 3 : 4	32 2 : 11 ~ 4 : 0	27 3 : 7 ~ 4 : 7		
	男児	7 2 : 4 ~ 3 : 4	11 2 : 11 ~ 4 : 0	8 3 : 7 ~ 4 : 7		
	女児	11 2 : 8 ~ 3 : 4	21 2 : 11 ~ 3 : 10	19 3 : 8 ~ 4 : 7		
第1期で年少児	全体	31 3 : 3 ~ 4 : 2	29 3 : 11 ~ 4 : 10	30 4 : 7 ~ 5 : 7		
	男児	17 3 : 3 ~ 4 : 2	16 3 : 11 ~ 4 : 9	17 4 : 7 ~ 5 : 5		
	女児	14 3 : 7 ~ 4 : 0	13 3 : 11 ~ 4 : 10	13 4 : 8 ~ 5 : 7		
第1期で年中児	全体	30 4 : 3 ~ 5 : 2	27 4 : 10 ~ 5 : 10	29 5 : 7 ~ 6 : 7		
	男児	15 4 : 3 ~ 5 : 2	15 4 : 10 ~ 5 : 8	15 5 : 7 ~ 6 : 5		
	女児	15 4 : 4 ~ 5 : 0	12 4 : 11 ~ 5 : 10	14 5 : 8 ~ 6 : 7		
第1期で年長児	全体	35 5 : 4 ~ 6 : 4	35 5 : 10 ~ 6 : 10	—		
	男児	16 5 : 4 ~ 6 : 1	16 5 : 10 ~ 6 : 7	—		
	女児	19 5 : 4 ~ 6 : 4	19 5 : 10 ~ 6 : 10	—		
計	114		123		86	

* 第1期で年長児群に関しては、第3期には卒園しており調査は実施していない。

手続き

(1) 実施時期

第1期は20xx年8月、第2期は6カ月後の20xx年2月、第3期は第二回目から8カ月後の20xx年11月に1日1クラスのペースで午前中の10時~12時の間に実施した。

(2) 実施場所と手続き

C保育園の各保育室で実施した。机と椅子は園児が普段使い慣れているものを使用した。普段は4人掛けで使用する机に斜めに2名が座り、他児の描画ができるだけ視界に入らないように工夫した。一度に実施する人数を10数名ずつにするため、2歳児は2回に分け、年少児・年中児・年長児のクラスはそれぞれ3回に分けて実施した。

(3) 教示

教示は筆者が行い、各担任保育士が補助的役割で対応した。具体的な教示は「人を一人描いてください。頭から足の先まで全部ですよ。しっかりやってね。」というDAM検査の基本的な教示に努めたが、各発達に合わせて、伝わりやすいよう、語尾などには柔軟に工夫をした。

(4) 実施方法

A4サイズの白い用紙、2歳児クラスは使い慣れている黒クレパスを使用し、年少児以上のクラスでは鉛筆と消しゴムを使用した。対象が乳幼児であることから、描画を無理強いはいしないようにした。また、使用する鉛筆や黒クレパスなどを口に入れたり、周りの人の目に向けたりすることのないよう、座席の位置の間隔を空けた座り方など、十分に配慮した。

(5) 倫理的配慮

個人情報取り扱い等について十分配慮すると共に、保育園の保育時間内の保育活動の一環であるということで、園長先生より対象園児と保護者に事前に説明の機会を設けてもらい、了解が得られた上で実施した。また、大阪総合保育大学倫理委員会の承認を得て行った。(承認番号：児保研—016)

(6) 分析方法

1. 人物画特徴の分析

三浦・渡辺(加)・渡辺(夕)・大山(2005)の内容分析による指標⁸⁾を参考とし、身体のバランスという視点で、特に手や足の描かれ方と毛髪や装飾の描かれ方のバランスに着目して筆者が作成した以下の指標により各指標の有無を0-1で得点化した。

具体的な指標として「(描かれた)画の性別」「目有り」「口有り」「鼻有り」「耳有り」「手が棒」「足が棒」「手も足も棒」「手も足も肉付き」「手も足も無し」「手か足に指」「毛髪有り」「服有り」「頭に装飾有り」「服に装飾有り」の15の指標を設定した。

アンバランス指標として「手も足も棒、または手か足が棒、または手も足も無し」かつ「髪有り」「服有り」「頭に装飾有り」「服に装飾有り」で1つ以上あるものを「アンバランス1」とし、「手も足も棒、または手か足が棒、または手も足も無し」かつ「髪有り」のものを「アンバランス2」として加えた。「アンバランス1」では、直接の身体感覚と直接の身体感覚とは異なるものとのバランスを、「アンバランス2」では、外界のものではないが身体感覚とは異なる「髪」と、直接の身体感覚とのバランスを見た。「髪」に関しては、「服」や、「髪や服に付属する装飾的なもの」とは異なり、人の身体の一部でありながら、「手」や「足」のように直接的に感覚刺激を得る部位ではなく、「髪」のスタイルによって装飾的な役割も果たし得るという特徴がある。そのため、「アンバランス2」を別に設けた。

また、三浦・渡辺(加)・渡辺(夕)・大山(2005)の全体的評価では描画の印象から7つのステージに分類して評価をしているが、筆者は、描画から得られる印象による検討を、事例を取り上げることで実施することとした。

2. DAM-MA, DAM-IQ の算出

小林・伊藤(2017)のDAM新版¹¹⁾に従い、DAMの各指標の有無により得点化し、DAM-MAを算出した。各子どもの生活年齢で除し、DAM-IQを求めた。

ただし、DAMでは基本的に男子像を評価するが、筆者は、子どもの人物画表現にはまずは「自己イメージ」が描き出されるという観点を重視しているため、本研究において子どもが自然に描出した画を評価した。

3. 量的分析

量的分析では、第1期から第2期への変化、第2期から第3期への変化という継時的推移を見た。表2に、各年齢群別の追跡時期(生活年齢の範囲)と追跡できた人数を示す。

①「(描かれた)画の性別」以外の14の指標とアンバランス1、アンバランス2の指標の経時的推移について、マクネマー(McNemar)検定により分析した。

② DAM-IQ, DAM-MAの変化量の経時的推移をpaired t testで分析した。

③ DAM-IQ, DAM-MAの性差を「第1期で2歳児」、「第1期で年少児」、「第1期で年中児」、「第1期で年長児」の各群の各時期に対して、paired t testで分析した。

4. 描画事例の経時的変化の検討

量的分析で変化があった指標を中心に、同じ子どもの時期による描画の変化を、「第1期で2歳児」群、「第1期で年少児」群、「第1期で年中児」群、「第1期で年長児」群、それぞれの代表的な事例を通して検討する。

III 結 果

1. 量的分析の結果

(1) 描かれた人物画の性別

「描かれた人物画の性別」のクロス集計結果を、第1期、第2期、第3期の時期別、年齢群別、性別に整理し表3に示した。これは、子どもが言語化して明らかに示した性別が反映されたものであり、特に「第1期で2歳児」群と「第1期で年少児」群では、言語の未発達から性別が不明であるものが一定数あった。しかし、「第1期で2歳児」群の第3期、「第1期で年少児」群の第2期という、年少時期の後半になると50%以上が自分と同じ性別の画を描いたことが言語化された。そして、男児で

表2 第1期から第2期、第2期から第3期の各年齢群別の追跡時期(生活年齢の範囲)と追跡できた人数

群	第1期		→	第2期		第2期		→	第3期			
	n	生活年齢(CA)の範囲		n	生活年齢(CA)の範囲		n	生活年齢(CA)の範囲				
第1期で2歳児	16	2 : 4	~ 3 : 4	→	2 : 11	~ 4 : 0	13	2 : 11	~ 4 : 0	→	3 : 7	~ 4 : 7
第1期で年少児	17	3 : 3	~ 4 : 2	→	3 : 11	~ 4 : 10	21	3 : 11	~ 4 : 10	→	4 : 7	~ 5 : 7
第1期で年中児	23	4 : 3	~ 5 : 2	→	4 : 10	~ 5 : 10	25	4 : 10	~ 5 : 10	→	5 : 7	~ 6 : 7
第1期で年長児	28	5 : 4	~ 6 : 4	→	5 : 10	~ 6 : 10				→		

*第1期で年長児群に関しては、第3期には卒園しており、第2期から第3期の追跡調査は実施していない。

は、「第1期で年中児」群の第1期, 第2期, 第3期, 「第1期で年長児」群の第2期, 女児では, 「第1期で年少児」群の第2期, 第3期, 「第1期で年中児」群の第1期, 第2期, 第3期, 「第1期で年長児」群の第1期, 第2期で70%以上の割合で自分と同じ性別の画が表現された。中でも「第1期で年中児」群の第2期, 「第1期で年長児」群の第2期では自分と同じ性別の画を描いた女児は100%であった。

(2) 描画データ指標の経時的推移

描画データの14の指標と2つのアンバランス指標の有無の経時的推移について McNemar 検定により明らかにした。

① 「第1期で2歳児」群の経時的推移

図1に, 「第1期で2歳児」群の第1期, 第2期, 第3期の描出推移を示した。「第1期で2歳児」群では, 1期, 2期, 3期にかけて, 手足は, 無から少しずつ棒の手足が表現され始める。目と毛髪への意識も高めである。

表3 自分と同じ性別の人物画を描いた人数と割合

	第1期		第2期		第3期		
	n	自分と同じ性別の画を描いた人数と割合 (%)	n	自分と同じ性別の画を描いた人数と割合 (%)	n	自分と同じ性別の画を描いた人数と割合 (%)	
第1期で2歳児	全体	18	3 (17%)	32	4 (13%)	27	15 (56%)
	男児	7	0 (0%)	11	2 (18%)	8	4 (50%)
	女児	11	3 (27%)	21	2 (10%)	19	11 (58%)
第1期で年少児	全体	31	9 (29%)	29	19 (66%)	30	21 (70%)
	男児	17	4 (24%)	16	9 (56%)	17	11 (65%)
	女児	14	5 (36%)	13	10 (77%)	13	10 (77%)
第1期で年中児	全体	30	22 (73%)	27	26 (96%)	29	24 (83%)
	男児	15	11 (73%)	15	14 (93%)	15	11 (73%)
	女児	15	11 (73%)	12	12 (100%)	14	13 (93%)
第1期で年長児	全体	35	24 (69%)	35	34 (97%)		
	男児	16	8 (50%)	16	15 (94%)		
	女児	19	16 (84%)	19	19 (100%)		

「第1期で2歳児」群

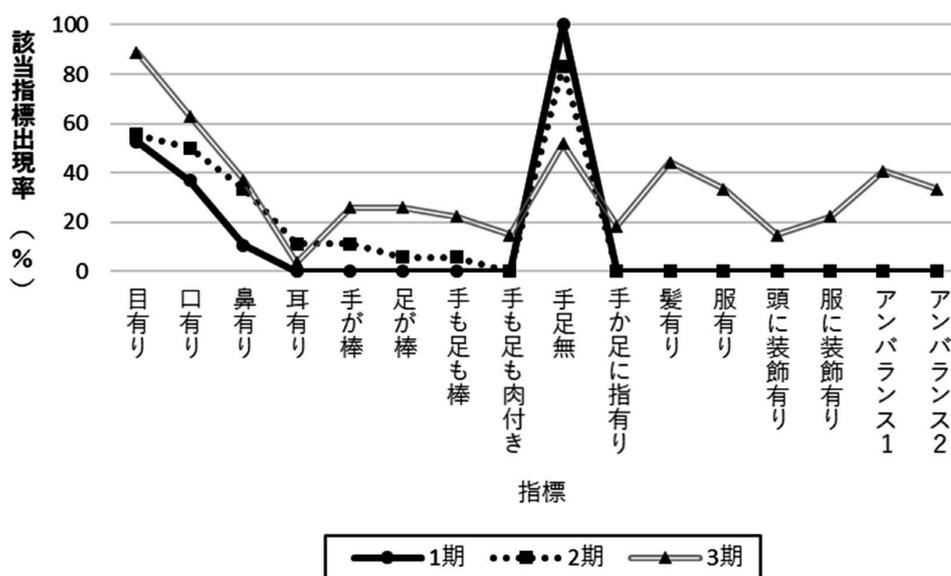


図1 「第1期で2歳児」群の第1期, 第2期, 第3期の描出推移

そして、全体的に3期である年少児となった時期の変化が大きい。

表4に1期から2期の14の指標とアンバランス指標1, 2の経時的変化と McNemar 検定の結果を示した。

「第1期で2歳児」群の1期から2期では、いずれの指標においても有意な変動は見られなかった。この時期には、まだ「手足肉付き」「手か足に指有り」「毛髪有り」「服有り」「頭に装飾有り」「服に装飾有り」等の指標を描出する段階の子どもはいなかった。

表5に「第1期で2歳児」群の第2期から第3期(約8カ月後)の14の指標とアンバランス指標1, 2の経時的変化と McNemar 検定の結果を示した。第2期から第3期では、有意な変動をする指標が5つ認められた。まず「手足無」において、手足を描かなかった割合は、第1期100.0%, 第2期83.3%, 第3期51.9%と推移しており、2期から第3期の変化において、5%水準で有意な差があった。即ち、この時期に手足を描く子どもが有意に増えたことを意味する。また、「毛髪有り」においては、第1期0%, 第2期0%, 第3期44.4%という推移をしており、これも第2期から第3期で、5%水準で有意に変動した。この時期に毛髪を描くようになった子どもが有意に増えたことを意味している。さらに、「目有り」「服有り」「アンバランス指標1」では、10%水準で有意な差が表れた。「目」は、この時期に明確に描かれることが増え、「服」も「毛髪」に次いで意識が高まってくる時期であることがわかる。毛髪や服、装飾への意識は

手足に比して高い傾向が「アンバランス指標1」の結果から明らかになった。

② 「第1期で年少児」群の経時的推移

「第1期で年少児」群では、手足無が減り、棒の手足が増えるが、肉付きの手足も少しずつ増えてきている。手か足に指有りも増えている。毛髪への意識が高い様子が見られ、アンバランス2の高さにつながっている。

表6に「第1期で年少児」群の第1期から第2期(約6カ月後)の14の指標とアンバランス指標1, 2の経時的変化と McNemar 検定の結果を示した。第1期から第2期で有意な変動をする項目が2つ認められた。「手足無」の指標、つまり手足を描かなかった割合は1期55%, 2期4.0%で、1期から2期で手足を描く子どもが5%水準で有意に増えた。「目有り」は10%水準で有意な差があった。この時期に目を描出する子どもが有意に増えた。

表7に「第1期で年少児」群の第2期から第3期(約8カ月後)の14の指標とアンバランス指標1, 2の経時的変化と McNemar 検定の結果を示した。第2期から第3期にかけては、有意な変動をする項目が一つ認められた。「服有り」において10%水準で有意な差があった。つまり、この時期に服を描出する子どもが有意に増えた。

③ 「第1期で年中児」群の経時的推移

「第1期で年中児」群では、肉付きの手足が増えていく。しかし、手足無は減じたものの棒の手足も目立つ。また、目と口が高い割合で描かれているのに比して鼻と耳の描出の少なさが表れている。特に第1期から第2期

表4 「第1期で2歳児」群の第1期から第2期(約6カ月後)の描画指標の推移検定

	N	変化(第1期→第2期)								p-value
		0→0 (1→1)		0→1 (1→2)		1→0 (2→1)		1→1 (2→2)		
		n	%	n	%	n	%	n	%	
第1期で2歳児										
目	16	5	31.3	2	12.5	1	6.3	8	50.0	>0.999
口	16	5	31.3	5	31.3	2	12.5	4	25.0	0.453
鼻	16	10	62.5	4	25.0	0	0.0	2	12.5	0.125
耳	16	14	87.5	2	12.5	0	0.0	0	0.0	0.500
手が棒	16	14	87.5	2	12.5	0	0.0	0	0.0	0.500
足が棒	16	15	93.8	1	6.3	0	0.0	0	0.0	>0.999
手足棒	16	15	93.8	1	6.3	0	0.0	0	0.0	>0.999
手足肉付		—	—	—	—	—	—	—	—	—
手足無	16	0	0.0	0	0.0	3	18.8	13	81.3	0.250
手か足に指	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
毛髪	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
服	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
頭装飾	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
服装飾	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アンバランス1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アンバランス2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

アンバランス1: 「手も足も棒、または手か足が棒、または手も足も無し」かつ「髪有り」「服有り」「頭に装飾有り」「服に装飾有り」を1つ以上

アンバランス2: 「手も足も棒、または手か足が棒または手も足も無し」かつ「髪有り」

表5 「第1期で2歳児」群の第2期から第3期（約8カ月後）の描画指標の推移検定

	N	変化（第2期→第3期）								p-value
		0→0（1→1）		0→1（1→2）		1→0（2→1）		1→1（2→2）		
		n	%	n	%	n	%	n	%	
第1期で2歳児										
目	13	0	0.0	5	38.5	0	0.0	8	61.5	0.063 [†]
口	13	1	7.7	5	38.5	1	7.7	6	46.2	0.219
鼻	13	5	38.5	4	30.8	2	15.4	2	15.4	0.688
耳	13	11	84.6	1	7.7	1	7.7	0	0.0	>0.999
手が棒	13	9	69.2	3	23.1	1	7.7	0	0.0	0.625
足が棒	13	8	61.5	4	30.8	1	7.7	0	0.0	0.375
手足棒	13	9	69.2	3	23.1	1	7.7	0	0.0	0.625
手足肉付	13	10	76.9	3	23.1	0	0.0	0	0.0	0.250
手足無	13	2	15.4	0	0.0	6	46.2	5	38.5	0.031 *
手か足に指	13	9	69.2	4	30.8	0	0.0	0	0.0	0.125
毛髪	13	7	53.8	6	46.2	0	0.0	0	0.0	0.031 *
服	13	8	61.5	5	38.5	0	0.0	0	0.0	0.063 [†]
頭装飾	13	10	76.9	3	23.1	0	0.0	0	0.0	0.250
服装飾	13	10	76.9	3	23.1	0	0.0	0	0.0	0.250
アンバランス1	13	8	61.5	5	38.5	0	0.0	0	0.0	0.063 [†]
アンバランス2	13	9	69.2	4	30.8	0	0.0	0	0.0	0.125

[†]p<.10, *p<.05

アンバランス1：「手も足も棒、または手か足が棒、または手も足も無し」かつ「髪有り」「服有り」「頭に装飾有り」「服に装飾有り」を1つ以上

アンバランス2：「手も足も棒、または手か足が棒または手も足も無し」かつ「髪有り」

「第1期で年少児」群

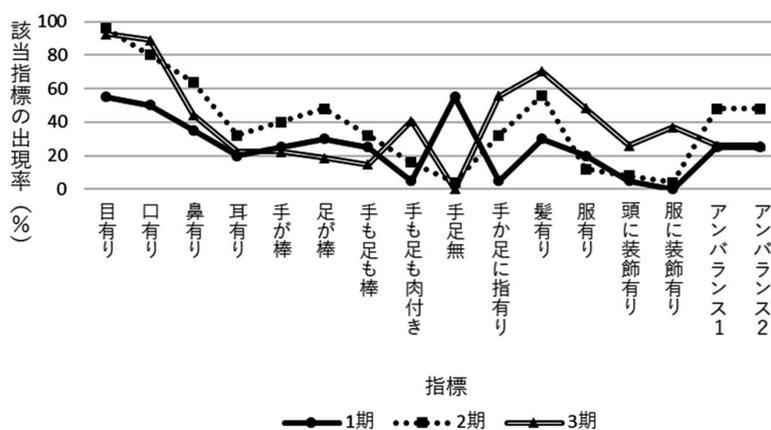


図2 「第1期で年少児」群の第1期，第2期，第3期の描出推移

にかけ鼻の描出は減退している。「手も足も肉付き」の指標は、第1期から第2期にかけて増えているものの、第2期から第3期では減少している。毛髪の出現率は、第2期と第3期では95%を超えている。

表8に「第1期で年中児」群の第1期から第2期（約6カ月後）の14の指標とアンバランス指標1，2の経時的変化と McNemar 検定の結果を示した。第1期から第2期で有意な変動をする項目が3つ認められた。まず「鼻」において、第1期では42.3%の子どもが描いていた

が、第2期では18.5%の子どもしか描いておらず、鼻を描く子どもが5%水準で有意に減った。また、「手足肉付」においては、第1期で46.2%、第2期では77.8%の子どもが描いており、5%水準で有意に増えた。「手が棒」は第1期から第2期で23.1%から7.4%と、10%水準で有意に減った。「手が棒」に比して「足が棒」に有意な変動が見られないのは、指標には入れていない「足は無し」の状態と分散された結果となっていることも関係していると考えられる。

表6 「第1期で年少児」群の第1期から第2期(約6カ月後)の描画指標の推移検定

	N	変化(第1期→第2期)								p-value
		0→0 (1→1)		0→1 (1→2)		1→0 (2→1)		1→1 (2→2)		
		n	%	n	%	n	%	n	%	
第1期で年少児										
目	17	0	0.0	7	41.2	1	5.9	9	52.9	0.070 [†]
口	17	1	5.9	7	41.2	2	11.8	7	41.2	0.180
鼻	17	4	23.5	7	41.2	2	11.8	4	23.5	0.180
耳	17	9	52.9	4	23.5	3	17.6	1	5.9	>0.999
手が棒	17	8	47.1	5	29.4	2	11.8	2	11.8	0.453
足が棒	17	6	35.3	6	35.3	3	17.6	2	11.8	0.508
手足棒	17	9	52.9	4	23.5	3	17.6	1	5.9	>0.999
手足肉付	17	14	82.4	2	11.8	1	5.9	0	0.0	>0.999
手足無	17	7	41.2	1	5.9	9	52.9	0	0.0	0.021 [*]
手か足に指	17	11	64.7	5	29.4	1	5.9	0	0.0	0.219
毛髪	17	6	35.3	6	35.3	1	5.9	4	23.5	0.125
服	17	11	64.7	2	11.8	4	23.5	0	0.0	0.688
頭装飾	17	14	82.4	2	11.8	1	5.9	0	0.0	>0.999
服装飾	17	16	94.1	1	5.9	0	0.0	0	0.0	>0.999
アンバランス1	17	7	41.2	6	35.3	1	5.9	3	17.6	0.125
アンバランス2	17	7	41.2	6	35.3	1	5.9	3	17.6	0.125

[†] $p < .10$, ^{*} $p < .05$

アンバランス1: 「手も足も棒, または手も足も棒, または手も足も無し」かつ「髪有り」「服有り」「頭に装飾有り」「服に装飾有り」を1つ以上

アンバランス2: 「手も足も棒, または手か足が棒, または手も足も無し」かつ「髪有り」

表7 「第1期で年少児」群の第2期から第3期(約8カ月後)の描画指標の推移検定

	N	変化(第2期→第3期)								p-value
		0→0 (1→1)		0→1 (1→2)		1→0 (2→1)		1→1 (2→2)		
		n	%	n	%	n	%	n	%	
第1期で年少児										
目	21	0	0.0	1	4.8	2	9.5	18	85.7	>0.999
口	21	2	9.5	3	14.3	1	4.8	15	71.4	0.625
鼻	21	3	14.3	4	19.0	8	38.1	6	28.6	0.388
耳	21	10	47.6	3	14.3	7	33.3	1	4.8	0.344
手が棒	21	10	47.6	2	9.5	6	28.6	3	14.3	0.289
足が棒	21	13	61.9	0	0.0	4	19.0	4	19.0	0.125
手足棒	21	13	61.9	1	4.8	5	17.6	2	9.5	0.219
手足肉付	21	10	47.6	7	33.3	4	23.8	0	0.0	0.549
手足無	21	20	95.2	0	0.0	1	19.0	0	0.0	>0.999
手か足に指	21	8	38.1	6	28.6	2	4.8	5	23.8	0.289
毛髪	21	7	33.3	2	9.5	1	4.8	11	52.4	>0.999
服	21	12	57.1	7	33.3	1	0.0	1	4.8	0.070 [†]
頭装飾	21	15	71.4	4	19.0	0	0.0	2	9.5	0.125
服装飾	21	16	76.2	4	19.0	0	23.8	1	4.8	0.125
アンバランス1	21	10	47.6	1	4.8	5	23.8	5	23.8	0.219
アンバランス2	21	10	47.6	1	4.8	5	23.8	5	23.8	0.219

[†] $p < .10$, ^{*} $p < .05$

アンバランス1: 「手も足も棒, または手も足も棒, または手も足も無し」かつ「髪有り」「服有り」「頭に装飾有り」「服に装飾有り」を1つ以上

アンバランス2: 「手も足も棒, または手か足が棒, または手も足も無し」かつ「髪有り」

「第1期で年中児」群

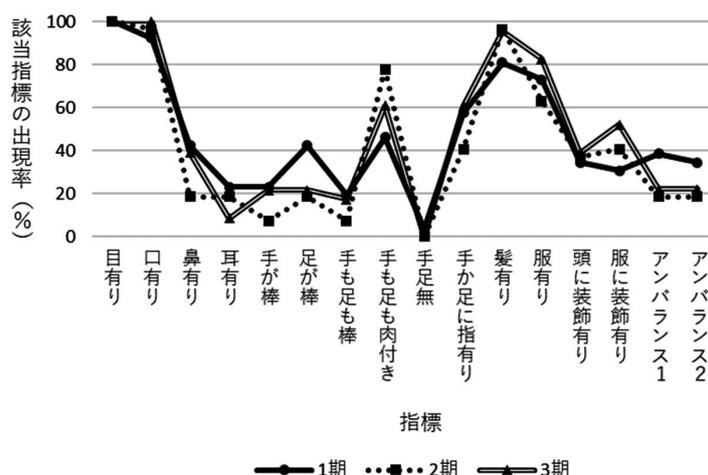


図3 「第1期で年中児」群の第1期, 第2期, 第3期の描出推移

表8 「第1期で年中児」群の第1期から第2期(約6カ月後)の描画指標の推移検定

N	変化 (第1期→第2期)								p-value	
	0→0 (1→1)		0→1 (1→2)		1→0 (2→1)		1→1 (2→2)			
	n	%	n	%	n	%	n	%		
第1期で年中児										
目	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
口	23	0	0.0	2	8.7	1	4.3	20	87.0	>0.999
鼻	23	13	56.5	0	0.0	7	30.4	3	13.0	0.016*
耳	23	14	60.9	3	13.0	4	17.4	2	8.7	>0.999
手が棒	23	17	73.9	0	0.0	5	21.7	1	4.3	0.063 [†]
足が棒	23	11	47.8	2	8.7	8	34.8	2	8.7	0.109
手足棒	23	17	73.9	1	4.3	5	21.7	0	0.0	0.219
手足肉付	23	5	21.7	8	34.8	0	0.0	10	43.5	0.008*
手足無	23	22	95.7	0	0.0	1	4.3	0	0.0	>0.999
手か足に指	23	7	30.4	3	13.0	6	26.1	7	30.4	0.508
毛髪	23	0	0.0	5	21.7	1	4.3	17	73.9	0.219
服	23	4	17.4	3	13.0	5	21.7	11	47.8	0.727
頭装飾	23	13	56.5	3	13.0	2	8.7	5	21.7	>0.999
服装飾	23	12	52.2	4	17.4	1	4.3	6	26.1	0.375
アンバランス1	23	12	52.2	2	8.7	7	30.4	2	8.7	0.180
アンバランス2	23	12	52.2	3	13.0	7	30.4	1	4.3	0.344

[†] p<.10, *p<.05

アンバランス1: 「手も足も棒, または手か足が棒, または手も足も無し」かつ「髪有り」「服有り」「頭に装飾有り」「服に装飾有り」を1つ以上

アンバランス2: 「手も足も棒, または手か足が棒, または手も足も無し」かつ「髪有り」

表9に、「第1期で年中児」群の第2期から第3期(約8カ月後)の14の指標とアンバランス指標1, 2の経時的变化と McNemar 検定の結果を示した。第2期から第3期で有意な変動をする項目は2つ認められた。また、「手足肉付」においては、第2期から第3期では77.8%から59.3%に、10%水準で有意に減った。「服有り」においては、63.0%から82.6%に、10%水準で有意に増えた。

④ 「第1期で年長児」群の経時的推移

「第1期で年長児」群では、第1期から第2期にかけて、「頭に装飾」「服に装飾」の指標が「第1期で年中児」群の出現率からのほぼ延長線上に増えた。「髪有り」「服有り」は第1期も第2期も高い出現率である。

表10に、「第1期で年長児」群の第1期から第2期(約6カ月後)の14の指標とアンバランス指標1, 2の経時的变化と McNemar 検定の結果を示した。この時期はど

表9 「第1期で年中児」群の第2期から第3期(約8カ月後)の描画指標の推移検定

	N	変化(第2期→第3期)								p-value
		0→0 (1→1)		0→1 (1→2)		1→0 (2→1)		1→1 (2→2)		
		n	%	n	%	n	%	n	%	
第1期で年中児										
目	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
口	25	0	0.0	1	4.0	0	0.0	24	96.0	>0.999
鼻	25	14	56.0	6	24.0	2	8.0	3	12.0	0.289
耳	25	18	72.0	3	12.0	4	16.0	0	0.0	>0.999
手が棒	25	20	80.0	4	16.0	0	0.0	1	4.0	0.125
足が棒	25	20	80.0	1	4.0	0	0.0	4	16.0	>0.999
手足棒	25	21	84.0	3	12.0	0	0.0	1	4.0	0.250
手足肉付	25	5	20.0	0	0.0	5	20.0	15	60.0	0.063 [†]
手足無	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
手か足に指	25	7	28.0	8	32.0	3	12.0	7	28.0	0.227
毛髪	25	0	0.0	1	4.0	1	4.0	23	92.0	>0.999
服	25	4	16.0	5	20.0	0	0.0	16	64.0	0.063 [†]
頭装飾	25	13	52.0	2	8.0	3	12.0	7	28.0	>0.999
服装飾	25	9	36.0	6	24.0	3	12.0	7	28.0	0.508
アンバランス1	25	19	76.0	2	8.0	0	0.0	4	16.0	0.500
アンバランス2	25	19	76.0	2	8.0	0	0.0	4	16.0	0.500

[†] $p < .10$, * $p < .05$

アンバランス1: 「手も足も棒, または手か足が棒, または手も足も無し」かつ「髪有り」「服有り」「頭に装飾有り」「服に装飾有り」を1つ以上

アンバランス2: 「手も足も棒, または手か足が棒, または手も足も無し」かつ「髪有り」

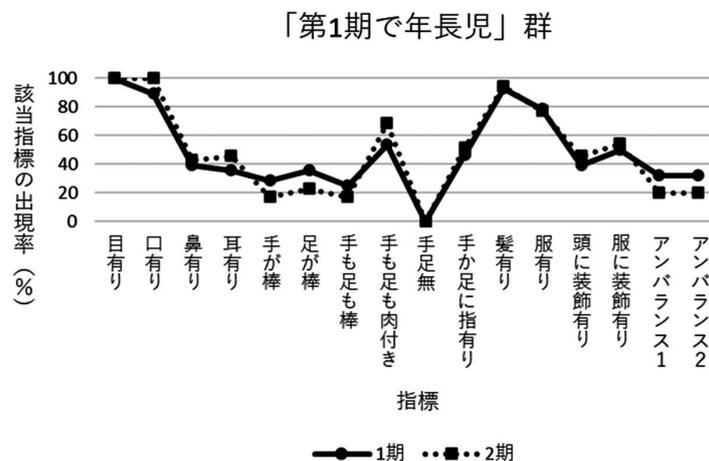


図4 「第1期で年長児」群の第1期, 第2期の描出推移

の指標においても大きな変化は見られず, 有意差はなかった。

⑤ 経時的推移のまとめ

量的分析の結果をまとめると, 5%水準で有意な差が見られた指標は, 「第1期で2歳児」群では, 第2期から第3期の「手足無」(有意に減った), 「髪有り」(有意に増えた), 「第1期で年少児」群では, 「手足無」(有意に減った), 「第1期で年中児」群では, 「鼻有り」(有意に減った), 「手足肉付き」(有意に増えた)の5つであった。

10%水準で有意な変動が見られた指標は, 「第1期で2歳児」群では第2期から第3期の「目有り」「服有り」「アンバランス1」(いずれも有意に増えた), 「第1期で年少児」群では第1期から第2期の「目有り」(有意に増えた), 第2期から第3期の「服有り」(有意に増えた), 「第1期で年中児」群では, 第1期から第2期の「手が棒」(有意に減った), 第2期から第3期の「手足肉付き」(有意に減った), 「服有り」(有意に増えた)の8つであった。

また, 縦断調査において, 各年齢群で時期が概ね重

表10 「第1期で年長児」群の第1期から第2期（約6カ月後）の描画指標の推移検定

	N	変化（第1期→第2期）								p-value
		0→0（1→1）		0→1（1→2）		1→0（2→1）		1→1（2→2）		
		n	%	n	%	n	%	n	%	
第1期で年長児										
目	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
口	28	0	0.0	3	10.7	0	0.0	25	89.3	0.250
鼻	28	12	42.9	5	17.9	3	10.7	8	28.6	0.727
耳	28	10	35.7	8	28.6	3	10.7	7	25.0	0.227
手が棒	28	18	64.3	2	7.1	4	14.3	4	14.3	0.688
足が棒	28	17	60.7	1	3.6	4	14.3	6	21.4	0.375
手足棒	28	19	67.9	2	7.1	3	10.7	4	14.3	>0.999
手足肉付	28	7	25.0	6	21.4	3	10.7	12	42.9	0.508
手足無	28	—	—	—	—	—	—	—	—	—
手か足に指	28	9	32.1	6	21.4	5	17.9	8	28.6	>0.999
毛髪	28	2	7.1	0	0.0	0	0.0	26	92.9	>0.999
服	28	5	17.9	1	3.6	1	3.6	21	75.0	>0.999
頭装飾	28	14	50.0	3	10.7	1	3.6	10	35.7	>0.625
服装飾	28	9	32.1	5	17.9	4	14.3	10	35.7	>0.999
アンバランス1	28	18	64.3	1	3.6	4	14.3	5	17.9	0.375
アンバランス2	28	18	64.3	1	3.6	4	14.3	5	17.9	0.375

アンバランス1：「手も足も棒、または手か足が棒、または手も足も無し」かつ「髪有り」「服有り」「頭に装飾有り」「服に装飾有り」を1つ以上

アンバランス2：「手も足も棒、または手か足が棒、または手も足も無し」かつ「髪有り」

なっているところがある。その時期には異なる子ども群でも類似の経時的変化の結果があらわれている。まず「第1期で2歳児」群の第3期と「第1期で年少児」群の第2期は、どちらも年少の学年の後半時期に当たる。「第1期で2歳児」群の第2期から第3期、「第1期で年少児」の第1期から第2期の経時的変化では、どちらにおいても「目有り」と「手足無」に有意な差が見られた。すなわち、この年少の後半時期が「目」の表出の顕著な時期であること、そして、「手足」の表出も顕著となってくる時期であることがわかる。次に「第1期で年少児」群の第2期から第3期と「第1期で年中児」群の第1期から第2期は、どちらも年中の学年の後半時期に当たる。「第1期で年中児」群の第1期から第2期の経時的変化では「鼻」の出現が有意に減り、「手足肉付き」が有意に増えたが、「第1期で年少児」群の第2期から第3期でも、有意な差とはなっていないものの、「鼻」の出現が減り、「手足肉付き」が増える結果となった。「第1期で年中児」群の第2期から第3期と、「第1期で年長児」群の第1期から第2期は、どちらも年長の学年の後半時期に当たる。「第1期で年中児」群の第2期から第3期の経時的変化では「服」の出現が有意に増え、「手足肉付き」の出現が有意に減ったが、「第1期で年長児」群では、それらに有意な変動という形では表れなかった。「第1期で年長児」群の「服」描出は第1期からすでに第2期と同じ様に75%以上の出現率で見られ、「第1期で年中児」群の第3期の

82.6%に近い、高い出現率であった。また、「第1期で年長児」群の「手足肉付き」は第1期で53.6%と、「第1期で年中児」群の第3期の59.3%に近い、低い出現率であった。

2. 描画の経時的変化の事例

(1) 「第1期で2歳児」群の経時的変化の事例

図5は、「第1期で2歳児」A子の第1期(a)、第2期(b)、第3期(c)の画である。量的分析で第2期から第3期の推移において5%水準で有意な差が見られた「手足無し」と「毛髪有り」の指標、10%水準で有意な差が見られた「服有り」の指標で、A子の画にも変化が見られた。A子の描出では特に、(b)の画を「お友達」と言いながら描いたが、(c)の画でもやはり「お友達」と言い、(b)で表そうとしていたものがどのようなものであったのかが、(c)によって具体的に伝わってきた。

図6は、「第1期で2歳児」B子の第1期(a)、第2期(b)、第3期(c)の画である。図6の(a)では、丸の中に目と口が描出され、さらに周囲にも何かを表そうとする描出があった。(b)では、B子が「手と足」と表現した棒が描出されているが、棒の本数が多く手足としてはバランスが悪い。(c)では、この時期、量的分析で手足を描く子どもが有意に増えたように、B子の画にも肉付きの足が描出された。しかし、手は無く、44.4%の子どもが描出した毛髪はB子の画には見られなかった。また、頭とい

(a)	(b)	(c)
		
A子の第1期の画 「Aちゃん(自分)」 CA:3歳2カ月 MA:3歳3カ月 IQ:103	A子の第2期の画 「お友達」 CA:3歳8カ月 MA:(算出不能) IQ:(算出不能)	A子の第3期の画 「お友達」 CA:4歳5カ月 MA:5歳9カ月 IQ:130

図5 「第1期で2歳児」A子の画

(a)	(b)	(c)
		
B子の第1期の画 CA:3歳3カ月 MA:3歳1カ月 IQ:95	B子の第2期の画 CA:3歳10カ月 MA:3歳3カ月 IQ:85	B子の第3期の画 CA:4歳6カ月 MA:3歳10カ月 IQ:85

図6 「第1期で2歳児」B子の画

うより顔が誇張されて表現されている印象を受ける。

(2) 「第1期で年少児」群の経時的变化の事例

図7は「第1期で年少児」のC男の第1期(a), 第2期(b), 第3期(c)の画である。描いた画を, 第1期には(a)「おかあさん」, 第2期には(b)「男の子」, 第3期には「男の子と女の子」(c)とC男は表現した。(a)には幾重にも描かれた円状の線の中に顔が描かれている。目も口も耳も鼻も描かれているように見える。しかし(b)には耳と鼻は見当たらず, (c)には「男の子と女の子」として描かれたうちの一人のみ鼻が描かれているように, 耳と鼻の描出は不安定な印象である。また, C男は, 第1期(a)には描いていなかった足を第2期(b)には描いており, 量的分析の結果を反映している。その足は棒状でひよ

長く描かれ, 大きい頭を中心とする上半身をいっしょうけんめい支えているかに見える。第3期(c)に描いた「男の子と女の子」の男の子には棒の手足, 女の子には棒の足のみが描かれており, 上半身に比して手足への意識は薄いような印象を受ける。量的分析でこの時期に「服有り」で有意な変動が見られたが, C男の描いた第3期の画, (c)でも服が描かれた。

図8は, 「第1期で年少児」のD男の第1期(a), 第2期(b), 第3期(c)の画である。第1期には手足は棒ではあるが, 指までしっかりと力強く描かれている。第2期(b)には手は棒で足は肉付き, 第3期(c)は手も足も肉付きとなっている。身体全体に意識が向き, バランスよく描かれている印象である。

(a) 	(b) 	(c) 
C男の第1期の画 「おかあさん」 CA:3歳7カ月 MA:3歳11カ月 IQ:109	C男の第2期の画 「Cくん(自分)」 CA:4歳1カ月 MA:3歳11カ月 IQ:96	C男の第3期の画 「男の子と女の子」 CA:4歳10カ月 MA:4歳11カ月 IQ:102

図7 「第1期で年少児」C男の画

(a) 	(b) 	(c) 
D男の第1期の画 CA:4歳2カ月 MA:5歳5カ月 IQ:130	D男の第2期の画 CA:4歳9カ月 MA:4歳11カ月 IQ:104	D男の第3期の画 CA:5歳5カ月 MA:6歳11カ月 IQ:128

図8 「第1期で年少児」D男の画

(3) 「第1期で年中児」群の経時的変化の事例

図9は、「第1期で年中児」のE男の第1期(a), 第2期(b), 第3期(c)の画である。第1期(a)では描いていた鼻を、第2期(b), 第3期(c)では描いておらず、目がとりわけ強調された描出となっている。また、第1期(a)で棒状に描かれていた足が、第2期(b)では肉付きとして描出されている。E男の場合、手は第1期(a)から肉付きで、指も描かれた。第2期(b), 第3期(c)でも手には指が描かれ、第3期(c)には足にも指が描かれた。しかし、第2期の5歳8カ月時の画と第3期の6歳5カ月時の画を比べると描かれた内容があまり変わっておらず、むしろ

全体バランスという点では第3期(c)の方が、頭ばかり大きくて、不安定なバランスの描出となっている。

図10は、「第1期で年中児」のF子の第1期(a), 第2期(b), 第3期(c)の画である。F子の場合、鼻は第3期にのみ描かれている。耳は3期とも描かれていない。手足は3期に渡って肉付きではあるが、1期, 2期は手足の描き方の貧弱さに比して毛髪と目と口を中心とした表情を念入りに描いている。2期から第3期では「服有り」が10%水準で有意に増えていることを象徴しているように、服にはこだわって、装飾を含めて丁寧に描いた。しかし、第3期は全体的にバランスがとれているように見

(a) 	(b) 	(c) 
E 男の第 1 期の画 CA:5 歳 2 カ月 MA:6 歳 1 カ月 IQ:118	E 男の第 2 期の画 CA:5 歳 8 カ月 MA:6 歳 9 カ月 IQ:122	E 男の第 3 期の画 CA:6 歳 5 カ月 MA:5 歳 2 カ月 IQ:81

図9 「第1期で年中児」E 男の画

(a) 	(b) 	(c) 
F 子の第 1 期の画 CA:4 歳 4 カ月 MA:5 歳 6 カ月 IQ:127	F 子の第 2 期の画 CA:4 歳 9 カ月 MA:5 歳 9 カ月 IQ:117	F 子の第 3 期の画 CA:5 歳 5 カ月 MA:9 歳 1 カ月 IQ:160

図10 「第1期で年中児」F 子の画

えるが、身体が描かれているというよりも豪華に装飾されたドレスが中心に描かれた印象であり、身体はドレスに伴って描出されたように見える。

(4) 「第1期で年長児」群の経時的変化の事例

図11は、「第1期で年長児」G子の第1期(a)、第2期(b)の画である。1.-(2)-⑤経時的推移のまとめで示したように、「第1期で年長児」群の第1期には「第1期で年中児」の第3期と同様に「手足肉付き」の指標で低い出現率であったが、図11のG子の(a)の画も、手は棒で、足はなく、「手足肉付き」の描出は見られなかった。また、「第1期で年長児」群の「服」の出現は第1期も第2期も75%以上の高い出現率であったが、G子の(a)の画にも(b)の画にも「服」は描かれ、第1期と比べると第2期では一層念入りに装飾が施されると共に、人物を取り囲

む装飾にも広がった印象を受ける。「第1期で年中児」群の第1期から第2期の経時的変化では「鼻」の出現が有意に減っており、その後の年齢群となる「第1期で年中児」群の第2期から第3期、「第1期で年長児」の第1期から第2期でも「鼻」の有意な変動はない。「第1期で年少児」群の第2期から第3期でも、有意な値とはなっていないものの、「鼻」の出現は減っている。つまり、年中児の学年の後半時期に減じていく「鼻」の指標は、年長児では概ね出現率が低いことが考えられるが、G子の(a)、(b)の画でも「鼻」の出現はなかった。

図12は、「第1期で年長児」H男の第1期(a)、第2期(b)の画である。図11のG子の(a)、(b)の画と同様に、H男の(a)、(b)の画にも「鼻」は描出されていない。そして第1期の画、(a)では、これもG子と同様に「手足肉

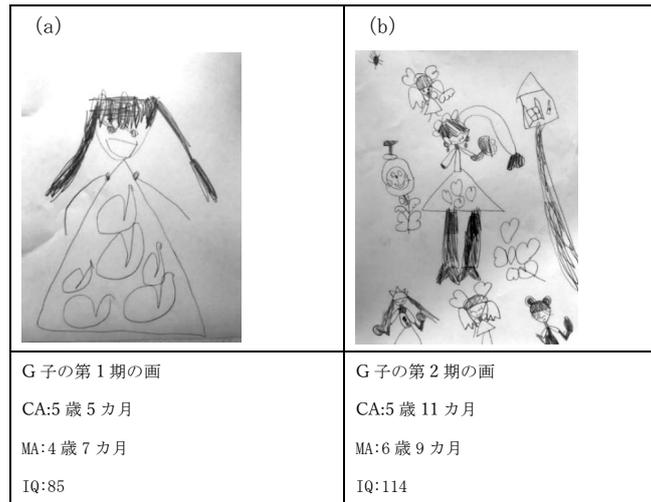


図11 「第1期で年長児」G子の画

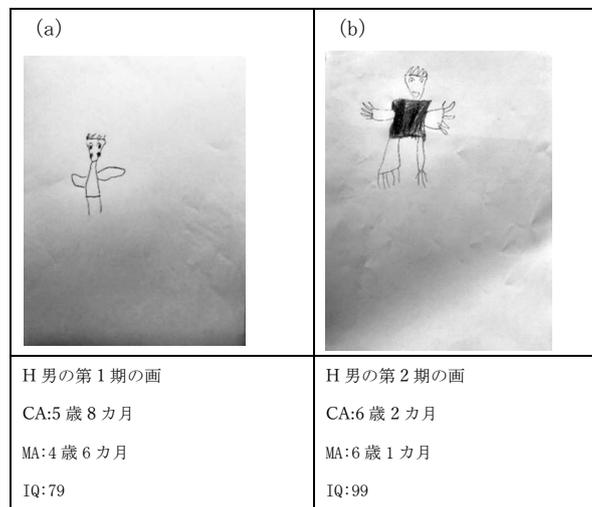


図12 「第1期で年長児」H男の画

付き」ではなく、手のみが肉付きで足は棒であった。H男の第2期の画、(b)では、手足の指が生き生きと描かれているところが印象的である。

3. DAM-MA, DAM-IQ

(1) 経時的推移

DAM-MA, DAM-IQに関しては、表1に示した対象児全体のうち、DAMで得点化することができたものを全体数(n)とした。表11に、第1期、第2期、第3期の調査対象人数とDAMで得点化することができた人数を示す。例えば「第1期で2歳児」群の第1期における描出の場合、「頭」としてカウントできる閉じるマルの描出にも至っていない画も多く、DAM-MA, DAM-IQで算出の対象となった画は表1で示した数の半数以下であった。その他、すべての年齢群において、描画に乗り気ではなかったり、明らかに人物描出ではなく、異なる物の描出

をした子どももあったため、それらを除いたものが、DAMで得点化することができた人数(n)である。

方法の箇所述べたように、小林・伊藤(2017)のDAM新版¹⁰⁾に従い、DAMの各指標の有無により得点を算出し、DAM-MAを算出した。各子どもの生活年齢で除し、DAM-IQを求めた。表12に、各年齢群別、時期別のDAM-MA, DAM-IQの平均値と標準偏差を示した。

第1期と第2期、第2期と第3期についての変化量の平均値について、対応のあるt検定を行った結果を表13に示した。

「第1期で年長児」群のDAM-MAは第1期の時に72.5±14.3(平均±標準偏差)、第2期の時に81.6±18.0と上昇した(p<.002)。「第1期で年長児」群の第1期から第2期の間で有意差が認められた。「第1期で2歳児」群の第1期から第2期のDAM-MA, DAM-IQ, 第2期から第3期のDAM-MA, 「第1期で年少児」群の第1期から第2期

表11 各時期の各年齢群の対象人数全体と、DAMで得点化することができた人数 (n)

	第1期		第2期		第3期	
	DAMで得点化 できた人数	対象人数全体	DAMで得点化 できた人数	対象人数全体	DAMで得点化 できた人数	対象人数全体
第1期で2歳児	7	18	9	32	21	27
第1期で年少児	11	31	21	29	24	30
第1期で年中児	25	30	27	27	27	29
第1期で年長児	28	35	35	35		

表12 各年齢群別、時期別のDAM-MA, DAM-IQの平均値と標準偏差

	第1期		第2期		第3期	
	n	平均値±標準偏差	n	平均値±標準偏差	n	平均値±標準偏差
第1期で2歳児						
DAM-MA	7	39.1±1.8	9	44.0±4.0	21	50.2±8.1
DAM-IQ	7	110.0±10.3	9	103.0±13.7	21	99.2±15.2
第1期で年少児						
DAM-MA	11	48.8±8.2	21	54.6±9.2	24	62.1±13.3
DAM-IQ	11	106.5±18.3	21	106.2±16.0	24	102.7±22.4
第1期で年中児						
DAM-MA	25	68.1±14.5	27	72.1±15.3	27	77.6±18.1
DAM-IQ	25	118.5±22.7	27	113.0±22.2	27	106.6±24.4
第1期で年長児						
DAM-MA	28	72.5±14.3	35	81.6±18.0		
DAM-IQ	28	103.5±19.1	35	107.6±24.5		

表13 DAM-MA, DAM-IQの変化量

	変化量 (第2期 - 第1期)			変化量 (第3期 - 第2期)		
	n	平均値±標準偏差	p-value	n	平均値±標準偏差	p-value
第1期で2歳児						
DAM-MA	5	4.0±3.4	0.058 [†]	6	8.8±9.0	0.062[†]
DAM-IQ	5	-6.8±6.7	0.087 [†]	6	-0.2±17.9	0.983
第1期で年少児						
DAM-MA	9	6.6±9.6	0.075 [†]	18	5.5±16.0	0.162
DAM-IQ	9	2.7±21.1	0.714	18	-6.8±26.9	0.296
第1期で年中児						
DAM-MA	23	2.7±11.3	0.263	25	4.3±15.0	0.165
DAM-IQ	23	-7.2±19.4	0.090 [†]	25	-8.0±21.4	0.074[†]
第1期で年長児						
DAM-MA	28	9.4±14.7	0.0022 [*]			
DAM-IQ	28	4.1±19.8	0.279			

† $p < .10$, * $p < .05$

のDAM-MA, 「第1期で年中児」群の第1期から第2期のDAM-IQ, 第2期から第3期のDAM-IQは10%水準で有意な傾向が見い出された。

(2) DAM-IQの性差

性差について, 第1期, 第2期, 第3期におけるDAM-MA, DAM-IQの得点の男女別の平均値とt検定の結果を, 年齢群別に表14, 表15, 表16, 表17に示した。

「第1期で2歳児」群においては, 第1期, 第2期,

第3期のいずれの時期にも, MA, IQ共に有意な性差は認められなかった(表14)。「第1期で年少児」群においては, 第3期のMAの平均値においてのみ10%水準で有意な性差(男児<女児)が認められた($p < .064$)(表15)。「第1期で年中児」群では, 第1期のMAで10%の有意な性差(男児<女児)が認められ($p < .052$), 第1期のIQ($p < .028$)と第2期のMA($p < .001$, 第2期のIQ($p < .001$), 第3期のMA($p < .001$), 第3期のIQ

表14 「第1期で2歳児」群の性別の平均値と標準偏差およびt検定の結果

		「第1期で2歳児」群					
		DAM-MA			DAM-IQ		
		平均値±標準偏差	平均値の性差	p-value	平均値±標準偏差	平均値の性差	p-value
第1期	男	n: 2 40.0±0.0	-1.2±1.5	0.469	n: 2 110.5±10.6	-0.7±9.4	0.944
	女	n: 5 38.8±2.0			n: 5 109.8±11.4		
第2期	男	n: 3 41.3±2.3	4.0±2.6	0.167	n: 3 95.3±12.7	11.5±9.4	0.260
	女	n: 6 45.3±4.1			n: 6 106.8±13.5		
第3期	男	n: 6 47.3±8.1	4.0±3.9	0.316	n: 6 92.2±13.2	9.8±7.2	0.188
	女	n: 15 51.3±8.0			n: 15 102.0±15.5		

p-value: unpaired t test

表15 「第1期で年少児」群の性別の平均値と標準偏差およびt検定の結果

		「第1期で年少児」群					
		DAM-MA			DAM-IQ		
		平均値±標準偏差	平均値の性差	p-value	平均値±標準偏差	平均値の性差	p-value
第1期	男	n: 5 53.0± 9.7	-7.7±4.6	0.128	n: 5 116.0±20.4	-17.3±10.1	0.121
	女	n: 6 45.3± 5.2			n: 6 98.7±13.0		
第2期	男	n: 12 54.5± 7.6	0.2±4.2	0.969	n: 12 106.1±12.7	0.4± 7.2	0.961
	女	n: 9 54.7±11.6			n: 9 106.4±20.4		
第3期	男	n: 13 57.5±13.4	10.0±5.1	0.064 [†]	n: 13 96.2±23.2	14.1± 8.9	0.126
	女	n: 11 67.5±11.4			n: 11 110.4±19.7		

p-value: unpaired t test

[†]p<.10

($p<.001$)で5%の有意な性差(男児<女児)が認められた(表16)。「第1期で年長児」群では、実施した第1期、第2期のMAとIQで5%の有意な性差(男児<女児)(いずれも $p<.001$)が認められた(表17)。

IV 考 察

1. 幼児期の人物画に表れる特徴と推移

本研究における人物画調査では、「描かれた性別」において、年齢が上のクラスになるほど明確に「何を(誰を)

描いたか」が言語化され、その結果「自分と同じ性別」の画が描かれたことが上のクラスになるほど多く判明していくことになった。これは、人物画には、身体感覚に基づく自分の身体イメージが投影されやすいという鬼丸(1981)の指摘¹⁰⁾からも納得ができる。特に「自分(を描いた)」との言語化がなくとも、概ね自己の像が反映されると考えられる。

今回の調査では、「人間の内側に属するもの」、「外界と人間を関係づけるはたらきをするもの」、「外界に属する

表16 「第1期で年中児」群の性別の平均値と標準偏差およびt検定の結果

		「第1期で年中児」群					
		DAM-MA			DAM-IQ		
		平均値±標準偏差	平均値の性差	p-value	平均値±標準偏差	平均値の性差	p-value
第1期	男	n: 14 63.1± 8.3	11.2±5.5	0.052 [†]	n: 14 109.8±12.1	19.8±8.4	0.028*
	女	n: 11 74.4±18.3			n: 11 129.5±28.5		
第2期	男	n: 15 62.5±11.5	21.5±4.3	0.000*	n: 15 98.3±15.7	33.1±5.8	0.000*
	女	n: 12 84.0±10.3			n: 12 131.3±13.9		
第3期	男	n: 13 65.9± 8.0	22.4±5.5	0.000*	n: 13 91.0±10.5	30.1±7.4	0.000*
	女	n: 14 88.4±18.2			n: 14 121.1±24.8		

p-value: unpaired t test

[†]p<.10, *p<.05

表17 「第1期で年長児」群の性別の平均値と標準偏差およびt検定の結果

		「第1期で年長児」群					
		DAM-MA			DAM-IQ		
		平均値±標準偏差	平均値の性差	p-value	平均値±標準偏差	平均値の性差	p-value
第1期	男	n: 12 61.4± 6.4	19.5±4.0	0.000*	n: 12 88.1± 7.9	26.9±5.3	0.000*
	女	n: 16 80.9±12.8			n: 16 115.0±16.8		
第2期	男	n: 16 68.8±13.2	23.6±4.6	0.000*	n: 16 90.8±18.1	31.0±6.5	0.000*
	女	n: 19 92.4±14.1			n: 19 121.7±19.9		

p-value: unpaired t test

*p<.05

もの」、という3つの観点から設定した指標で人物画を分析した。量的分析の結果と、さらに各年齢群で時期が概ね重なっているところで類似の継時的変化の結果があらわれている部分を整理すると、年少の学年の後半時期（3歳後半から4歳後半にかけて）に、「目」と「手足」の表出が顕著に増えたこと、年中の学年の後半時期（4歳後半から5歳後半にかけて）に、「鼻」の出現が減り、「手足肉付き」が増えたこと、年長の学年の後半時期（5歳後半から6歳後半にかけて）には、「服」の出現が増え、「手足肉付き」の出現が減ったこと、などが特に主要な結果として明確になった。

郷間（英）・木下・川越・中市・木村・郷間（安）（2010）² や川越・郷間（英）・牛山・池田・郷間（安）（2011）³ が指

摘した身体像のアンバランスな特徴については、省略される部位（鼻など）や簡略化（手足など）される部位がある一方で、外側に属する服などが装飾を含めて念入りに描出される傾向が、量的分析と事例の検討からも見出し、描かれたアンバランスな身体像の特徴を、本研究においても確認できた。

「人間の内側に属するもの」では、「目」が、年少児期の後半には、「口」「耳」「鼻」に比して突出して描出されるようになり、そのまま描出の要となった。浜田（1983）は、「赤ちゃんは、相手が自分に向かって働きかけてくれるから、あるいは自分が相手に向かって働きかけたいからこそその顔を見、目を合わせる」とし、「ファントの実験で赤ちゃんが、人間の顔の図をよく見るのは、その顔

から見られている、つまり志向されていると感じるからだ」と続けている¹²⁾。そして、「人間の心性や行動は、単にその人の個体の中だけに閉じた現象としてあるのではなく、他者に向けられ、他者から向けられる関係の現象としてあるもの」だと説明する。つまり、「人間の内側に属するもの」であっても、とりわけ「目」は、人の「志向性」ゆえに、他者との関係の現象として、重要な位置づけにあるものと言えるのではないだろうか。

目と同じく「人間の内側に属するもの」である「鼻」については、加藤・山田(2010)が年長児であっても鼻を描かない事例が目立つとし、これをテレビや漫画などの影響ではないかと指摘している¹⁾。今回の調査では、「第1期で年中児」群の1期から2期にかけて「鼻」の描出が有意に減り、「鼻」の出現が遅いというよりも、「第1期で年中児」E男の画の変化に見られるように、一旦出現していたにもかかわらず、出現しなくなるという特徴が浮き彫りになった。自分の身体感覚が主導するのであれば、「鼻」は主要な感覚器官であり存在感の大きさは時期によって変化はしないと推察される。しかし、今回の結果から、加藤・山田(2010)の指摘のように、テレビや漫画、あるいはその他のメディアツールから視覚的に得る刺激が自らの身体感覚を上回り「目」と「口」中心の描出に年齢と共に偏っていく傾向が示唆された。昨今では、スマホ、iPadなどの、小型でどこにでも持ち運ぶことができるツールを通し電子画面を始終見ている幼児の姿を頻繁に目にするようになった。加藤・山田(2010)の指摘以降、電子機器文化は加速しており、刺激の影響は膨らんできている可能性が高く、重視すべき点であろう。「外界と人間を関係づけるはたらきをするもの」では、「第1期で年少児」群の1期から2期にかけてC男の画に見られるように、手足の描出が有意に増えるなど、大きな変動があった。問題と目的の箇所でも述べたように、津守(1987)は、C男の画に見られるような、渦巻の中に目と口と鼻がある画について、「顔のように見える渦巻は、むしろ人間の全体である。このように人間を表現する子どもにとっては、人間は回転する空間としてとらえられているとあってよい。」とし、人間を、中心を持った渦巻の統合体として表現された画であると説明する⁹⁾。C男のように渦巻で人間を統合体としてじゅうぶんとらえ、一つのまとまりとしての自己の安定がはかられた上でこそ、手足という線の発出につながっていくように思われる。また、「手足肉付き」については、「第1期で年中児」群の第1期から第2期にかけて有意に増えたものの、第2期から第3期にかけては有意に減っている。つまり、年長児期の後半には減ったことになる。F子の画では、第2期で「手足肉付き」の描出は素朴な形で見られるが、第3期では、身体はドレスを中心に描かれて、「手足肉付き」は見られるものの、ドレスに付加的に表れているかのような印象を与える。同じ年齢群の

同時期の他の子どもの画では、ドレスだけは念入りに描いたが、足の描かれていない画も複数見られた。これらの画は、「人を描く」というテーマに向き合う際に重視したものが身体そのものではなかったようにも見える。一方でH男の場合は、第2期では「手足肉付き」と共に「指」も手足にはっきりと描出し、外界に向けての意志が伝わってくる印象である。全体的には年長時期の後半で、「服」が増え、「手足肉付き」は減った。つまり、「外界に属するもの」については、年齢が上昇するほど重視の比重は高まった。「毛髪」「服」、そしてそれらへの装飾は強調され、熱心に描出されるようになる傾向が見られ、反対に「外界と人間を関係づけるはたらきをするもの」の描出は弱くなった。とりわけ女兒では単に「服」というよりは装飾が施されたドレスの描出が目立ったが、磯部(2017)は、こうした女兒の特徴は、その背景に、社会的に「可愛いらしくありたい」「可愛いらしく見られたい」という女兒特有の、他者からどう見られるかを意識した思いが関係しているのではないかと述べている¹³⁾。昨今の風潮として、ビジュアル的なものを過度に重視して価値を置き、その情報を氾濫させるような社会の影響を受けた子どもたちは、自分の内側の身体的な感覚から湧き上がってくるエネルギーに忠実になるのではなく、視覚という表面にあらわれるものにコントロールされがちになってしまっているのではないだろうか。上述した磯部(2017)は、幼児期において、身体に関して絵で表現する場合、実際に体験するということが大切であるとし、身体イメージについて不安定な概念が確実なものになるためには、身体を通して、子どもと外界の事物(環境)の相互的な交流が必要であると説明する¹³⁾。

年齢のより低い時期から、目と口を中心とした顔(表情へのこだわり)、毛髪、身体への意識の向けられ方の延長線上に、年齢が上昇してからの描出の結果がある。年少時期には多くの子どもの画に手足が描出されてくるが、その前には人間を、中心をもった渦巻の統合体として、回転する空間として、動的にとらえ、十分認識していく体験を重視することが必要である。身体を含めて常に動きを持つ自己と他者の生身の感覚を味わうことを積み重ねていくことが欠かせないと思われる。電子機器などによる視覚的な刺激が過多であると、それ以外の身体的な感覚がなおざりになり、自分で自分の身体をコントロールすることさえ困難になりかねないのではないだろうか。鬼丸(1981)は、児童画は身体感覚の強さによって支配されるとしており¹⁰⁾、体験の重要性を述べている磯部(2017)の説明¹³⁾とも概ね一致する。例えば、幼児の初期の描画表現に見られる円形を「中身のびっしり詰まった生きた実体」であり、「周囲を手でなぞりながらあるものの形体をしっかりと触知し得たことを意味する」とする。つまり、幼児の描画は身体的な触知運動の軌跡であること、事物の具体性や空間関係は、さわり、なめ、つかみ、は

い、歩く、触知と運動の経験の蓄積によって、はじめて獲得されること、このことが十分積み重ねられてはじめて、視覚が単独で事物と空間の具体性をとらえ得るようになる」と述べ、幼児の描画が「視覚主導型」ではなく、「身体感覚主導型」であることを強調している。逆に言うと、身体感覚がしっかりと構築されていくことにより、鬼丸(1981)が言うところの「中身のびっしり詰まった生きた実体」としての表現が表れてくると言えるのではないだろうか。「第1期で年少児」D男は、外遊びが大好きでよく身体を動かしているというエピソードが納得できるような、身体全体が力強く描出されている印象の画を描いたが、こうした事例からは、描画という表現手段を得ただけではなく、表現したい欲求につながる身体感覚に基づく実体験の蓄積こそが、まず子どもにとって必要であることが示唆される。

今回の調査では、幼児の人物画の特徴を少しでも見出すために、先行研究に基づき新たに作成した指標を用いて分析したが、実際に描かれた幼児の人物画に見られた特徴から、分析方法の再考が必要である。しかし、経時的に子どもの発達の変化を追って調査し、量的な分析と質的な分析を同時に行っていくことにより、子どもの実体をよりつかみやすくなることを認識できた。今後は、幼児が、視覚的に得ている身体イメージよりも、自分の身体感覚に基づいた身体イメージを描出しやすくするため、例えば磯部(2017)が、「鉄棒にぶら下がっているところの描画」から身体イメージを調査した¹²⁾ように、「何かをしているところ」、言わば動的人物画を描いてもらい、そこに表現されたものを分析することも検討したい。

2. DAM-IQの結果と推移

男女を統合した結果では「第1期で2歳児群」の第3期はDAM-IQが99.2という値で100を超えていなかったが、「第1期で2歳児群」の第1期と第2期、「第1期で年少児」群のすべての時期、「第1期で年中児」群のすべての時期、「第1期で年長児」群のすべての時期においてDAM-IQは100を超えていた。加藤・山田(2010)¹⁾、郷間(英)・木下・川越・中市・木村・郷間(安)(2010)²⁾、川越・郷間(英)・牛山・池田・郷間(安)(2011)³⁾らの先行研究ではIQの全体的な遅れが指摘されていたが、これらの先行研究はDAMの旧版を用いてIQが算出されたものであった。今回の調査で用いた新版では、現代の子どものたちの状態に合わせて改訂されていることから、全体的にはIQが100を超えるという妥当な結果につながったものと考えられる。しかし、加藤・山田(2010)¹⁾、郷間(英)・木下・川越・中市・木村・郷間(安)(2010)²⁾、川越・郷間(英)・牛山・池田・郷間(安)(2011)³⁾らの先行研究で合わせて指摘されていた、女兒が男児よりも高得点であるという点においては、今回の調査において

も同様の結果となった。「第1期で2歳児」群では有意に表れなかった性差が、それ以降は着実に段々と広がっていった。加藤・山田(2010)の研究¹⁾で実施された調査と同じように、本調査においても、「男子像」を描かせて採点する、とはしていないことから、女兒では同性の「女子像」が多く、服や装飾が丁寧に描かれた。このことが「男子像」を描くよりも高得点につながった可能性は考えられる。しかし、DAMでは「人間の内側に属するもの」、「外界と人間を関係づけるはたらきをするもの」、「外界に属するもの」などの、どれもが等しく採点される。つまり、高い点数を得て高いMAに結びつき、その結果高いDAM-IQが算出されても、詳しく描出された毛髪や服ばかりが強調され、そこから垣間見える手足が貧弱で不安定な身体像が映し出される画があったとしても、当然のことながらIQ結果からは見えてこない。子どもの描く人物画には自己像が反映されやすいことを考えると、女兒ではとりわけ「人から見られる自分」を意識する傾向が強く、その背景として、視覚的な刺激や情報の影響が大きく、身体感覚を上回りやすくなっているのではないかと推察される。また、日頃からキャラクターの絵を良く描いている子どもは、そのパターンで人物画を描くことで高得点をとることがある(長尾・樋野・佐野・飯尾, 2016)という報告¹⁴⁾もあるが、これも視覚的な情報が主となった表われである。筆者(2020)は、「自閉症スペクトラムなどの発達障害の子どもたちの中には、人物画を「描けない」と答える一方で、既成のキャラクター等であればキャラクターそっくりに整ったボディバランスで上手に描けたりする」ことを報告した¹⁵⁾。浜谷、木原(1990)も、自閉症児の描画を通常の幼児と比較し、「外界からの視覚的な刺激を概念化することよりも、視覚的な形態をそのままに記憶し再生して絵にしている傾向が強い」と述べている¹⁶⁾。そして、通常の幼児の描画の技法は、「子どもが対象を見ることによって獲得されていくというよりは、対象との実践的なかわりを基盤にした対象についての概念化のはたらきを通して獲得されるものである」と浜谷、木原(1990)は続けて説明している。これは、既述した「身体に関して絵で表現する場合、実際に体験するということが大切である」とした磯部(2017)¹³⁾と同じく、鬼丸(1981)のいう、「身体感覚主導」¹⁰⁾であるからこそ獲得していくことのできる発達の基盤があることを示しているのではないだろうか。子どもたちの描く人物画が、今後、より「視覚主導型」になっていくとすれば、発達上の何らかの難しさを抱えた子どもと健常児との違いは、さらに曖昧になっていくことが推測される。身体感覚が構築されるより前に「視覚主導型」に引き上げられた子どもの画は、形は一見できているように見えるが、そこには「生きた実体」としての生身の人物のイメージは映し出されてこないのではないかと考える。DAMを用いる場合、鬼丸(1981)のい

う¹⁰⁾「身体感覚主導型」によって描かれた画こそ、「生きた実体」としての子どもの発達の姿を適切にアセスメントできる画になる。DAMを用いてアセスメントする上では、数値を単純に見ていくだけでは子どもの発達の全体的な姿を見ることはできない。DAMでは測りきれない、子どもの人物画に表れてくるバランスを吟味するためにも、今回の調査のように、別の角度からの指標も用いて分析することには意義があった。

V 研究のまとめ

本研究においては、異なる年齢群を3期に渡って縦断調査した。重なりのある時期の子どもに同様の結果が見られたことで、年齢による描画特徴がより浮き彫りになった。年少の学年の後半時期（3歳後半から4歳後半にかけて）に、「目」と「手足」の表出が顕著に増えたこと、年中の学年の後半時期（4歳後半から5歳後半にかけて）に、「鼻」の出現が減り、「手足肉付き」が増えたこと、年長の学年の後半時期（5歳後半から6歳後半にかけて）には、「服」の出現が増え、「手足肉付き」の出現が減ったこと、などが特に主要な結果であった。この結果から、子どもは、はじめ、身体感覚主導型で描画表現を行うようになるが、次第に、周囲を取り巻く文化的背景や生活環境の影響を受けることで、視覚主導型に移行して、自分の身体像の獲得が不安定になってしまいやすいことを示唆していることが推測される。

また、DAM新版を用いた分析では、DAM旧版を用いた研究で指摘されていた、IQの全体的な遅れは見られなかった。しかし、性差については、女兒が男児よりIQ値が高いという結果が、幼児期の上の学年になるほど大きく表れた。その理由としては、女兒の、人に見られる自分を強く意識して、より詳細な描出をする傾向があることや、日頃からキャラクターなどを描き慣れていて、そのパターンで表現するという傾向があらわれていることが推測される。

昨今の家庭環境では、子どもが身体感覚を豊かに耕す経験を積むことや、人の中で互いに触れ合いながら、多様な関係性を深く育む機会を得にくい状態となっている。それゆえ、子どもが子どもらしく遊びを通した直接体験から身体感覚を養い、多様な人間関係の中であらゆる感性を育てていくためには、保育園などの集団生活は、より重要な役割を果たす場となっているのではないだろうか。幼児の人物画の調査は、幼児の成長発達にとって何が必要であるかの示唆を、我々に強く与えてくれるものとなった。

今後の課題

今回、縦断調査の量的分析においては第1期から第2期、第2期から第3期の変動を取りあげた。6カ月から

8カ月の間隔の分析では変化がない指標が多かった。今後、第1期から第3期の、1年以上の間隔における変動と、各年齢群を男児と女児に分けて各期の描出推移も分析し整理することを課題としたい。また、幼児期の人物画の特徴を見極めるための研究方法については、子どもの生活環境などの背景や子どもの状況に合わせ、再考し精査をしていき、保育の現場での活用の可能性を探っていきたい。

引用文献

- 1) 加藤寿宏・山田 孝 (2010). 現在の子どもの人物画—日本版ミラー幼児発達スクリーニング検査およびグッドイナフ人物画知能検査の標準化データとの比較— 作業療法, 29(6), 743-752
- 2) 郷間英世・木下佐枝美・川越奈津子・中市 悠・木村秀生・郷間安美子 (2010). 現代幼児の人物画描画発達と気になる子の描画グッドイナフ人物画検査を用いた検討 京都教育大学紀要, 117, 63-71
- 3) 川越奈津子・郷間英世・牛山道雄・池田知美・郷間安美子 (2011). 現代の子どもの描画発達についての研究—保育園幼児のグッドイナフ人物画知能検査による検討— 小児保健研究, 第70巻, 第2号, 257-261
- 4) 小林重雄 (1977). DAMグッドイナフ人物画知能検査ハンドブック 三京房
- 5) Frostig, M. (マリアンヌ・フロスティグ) 小林芳文 (訳) (2007). フロスティグのムーブメント教育・療法—理論と実際— 日本文化科学社
- 6) 郷間英世・大谷多加志・大久保純一郎 (2008). 現代の子どもの描画発達の遅れについての検討 奈良教育大学 教育実践総合センター研究紀要, 17巻, 67-73
- 7) 今給黎慎子・藤原雅子・安川千代・松山光生・山田弘幸・倉内紀子・笠井新一郎 (2006). 健常児の人物画の発達 九州保健福祉大学紀要, 7, 153-159
- 8) 三浦由梨・渡辺加礼・渡辺タミ子・大山建司 (2005). 幼児期女児の描いた人物画によるボディイメージ発達の研究 山梨大学看護学会誌, Vol.3, No.2, 13-20
- 9) 津守 真 (1987). 子どもの世界をどうみるか 行為とその意味 日本放送出版協会
- 10) 鬼丸吉弘 (1981). 児童画のロゴス 勁草書房
- 11) 小林重雄・伊藤健次 (2017). DAMグッドイナフ人物画知能検査 新版 ハンドブック 三京房
- 12) 浜田寿美男訳編 (1983). ワロン／身体・自我・社会 ミネルヴァ書房
- 13) 磯部美也子 (2017). 人との関係に問題をもつ子どもたち 発達, 149, 86-93
- 14) 長尾秀夫・樋野仁美・佐野典子・飯尾寛治 (2016). 発達が気になる子ども (患者) の外来診療の工夫—人物画 (DAM) の発展的活用を通して— 小児科臨床, 69(7), 1248-1254
- 15) 末次絵里子 (2020). 自閉症児と母親の関係性の発展—描画表現を通して 臨床描画研究, 35, 120-140
- 16) 浜谷直人・木原久美子 (1990). 自閉症児の特異な描画技法の発達過程 教育心理学研究, 38, 83-88

Summary

A three-phase longitudinal study was performed for children in different age groups. Since children who were included across two age groups showed similar and specific drawing characteristics, changes with growth were shown more clearly. The results revealed drawing characteristics specific to individual age groups, with the following major findings: in children aged 3 years and 6 months to younger than 5 years, the frequency of expression of the eyes and limbs was significantly higher; in those aged 4 years and 6 months to younger than 6 years, the frequency of expression of the nose was lower and that of more realistic limbs was higher; and in those aged 5 years and 6 months to younger than 7 years, the frequency of expression of clothes was higher, and that of more realistic limbs was lower. These findings suggest that children begin to draw a picture mainly based on their physical sense, and then gradually move to expression mainly based on visual sense, as they are affected by surrounding cultural backgrounds and living environments. This suggests that they might then find it more difficult to draw their body shapes.

In the analysis with a new version of the Draw a Man (DAM) test, there was no general decrease of IQ, in contrast to the results in a study with an old version of the DAM test. However, regarding sex difference, IQ of girls was higher than that of boys as they grew older. This might be because girls tended to draw pictures in detail due to their awareness of observation of themselves by others, and to draw patterned pictures because they were used to drawings of comic book characters in daily life.

In the present family environment, it is difficult for children to accumulate experiences for development of physical sense and to obtain opportunities to cultivate deep relationships with others through mutual communications. Therefore, group activities at nursery schools may play a more important role in enabling children to develop physical sense through direct experiences in play and other senses in relationships with others. The results of this study on figure drawings by young children provide strong indicators of the required needs for growth of children.